

【同窓会だより】

### 「29 回生 クラス会 焼津黒潮温泉で」

卒業後半世紀有余(53年)クラス会を重ねること18回、今回は遠洋漁業マグロ水揚げ日本一の焼津で新鮮で美味、海の幸という言葉をもさに実感でき富士山と駿河湾を一望できる焼津黒潮温泉ホテル松風閣で(平成19年11月14、15日)おこなわれ、長旅の疲れを黒潮温泉で癒していただき先ず一昨年10月27日黄泉の国へ旅立たれ永久の別れとなった恩師木村先生のご冥福を祈り黙禱を捧げてから宴に入りました。高齢と共に本人及びご家族の体調不良で参加できなかった方もいましたが、それでも同伴者と共に沖縄からも、はせ参じて下さった方もおり幹事及び出席者一同感動しました。深夜まで共に西院春栄町の校舎での思い出話に花を咲かせました。幸いに両日とも天候に恵まれ日本最秀峰でありかつ信仰の山としての富士山が各部屋の窓から、また翌日日本観光地百選平原の部で一位となった日本平からも雄姿が見られみんな感激し、由比本陣記念館、東海道広重美術館を鑑賞し由比でしか食することができない生の桜えび、桜えびづくしの昼食をし、来年は三重県で滝本さん、辻井さんにお世話していただくことをお願いし静岡駅にて惜別しました。

(幹事 友正 保 吉川雪男 山下秀雄) 山下記

### 「31 回生 同窓会 鳥羽で開催」

去る10月26日(金)、あいにく模様とはなりましたが、2年振り専校第31回生の同窓会を三重県市で開催しました。今回お世話頂いたのは、西田博君で、お一人で準備頂いたので実に大変だったと思います。

準備して頂いた旅館は、鳥羽駅のすぐ近くにある老舗の有名旅館「戸田家」で、この旅館はおよそ170年の歴史を重ねているようです。露天風呂も沢山あり、早く着いた人達はゆっくりと温泉を楽しむことができました。

最大の楽しみにしていた宴会が6時から始まりましたが、開宴に先立ち一昨秋逝去された、恩師である木村幾生先生のご冥福を祈り全員で黙禱を捧げました。木村先生は3年前京都で開催しました同窓会には、実にお元気な姿でご出席して頂いただけに、あの時が最後の別れになったかという、複雑な気持ちでいっぱいでした。その後、竹下君と田中君に対し叙勲の祝意を述べ、いよいよ開宴となりました。

西田君お気遣いの魚尽くしの料理に舌つつみを打ちながら、話は在校時代へと直ちにタイムスリップしていきました。今回出席できなかった方々のメッセージを読ませて頂きましたが、ほとんどの方々が本人か奥様のどちらかが、病気のため出席できないことが理由であり、実に淋しい思いと共に、お互いの高齢化を実感した次第です。

しかし、今回出席できた人は実に元気な人ばかりですから、宴会終了後はカラオケルームへと足が動き、演歌や懐メロで大いに盛り上がりました。さらにその後も宿泊室に集合し、全員午前0時近くまで語りました。

翌日は五十鈴川で手を清め「伊勢神宮内宮」を参拝し、31回生全員の健康と平安を祈りました。その後、「おかげ横町」を散策しましたが、「赤福」閉店の張り紙を横目でにらみながら、唯一伊勢の「おみやげ」の買えなかったことが、実に残念な思いでした。昼食後、次回は2年後に、桑原忠君と山本恒夫君のお世話で、お酒とお米の美味しい越後で開催して頂くことをお願いして、健康での再会を約束して、実に楽しかった同窓会を散会しました。

(山田記)

### 「皆回生(37回生)の交流記」

お伊勢詣り

卒業後 45 年が経過、みんなが優待パスを利用できる年齢になった。振り返れば、この間が「早かった」や「長かった」などの感想はそれぞれ、何はともあれ、パワフルに生き延びたいと『お伊勢詣りクラス会』を持った。

北は福島県、南は沖縄県からと 19 人の参加者があった。今回のメインはお伊勢さんへ。そこでは皇大神社(内宮)の神楽殿に昇り、お神楽を奉納した。ここでのご祈祷は、志はありながら参加できない友への思いも込め、同級生の無病息災をお願いした。

何度か伊勢参りをした仲間も、神楽殿まで昇ることはなく、いつもと違うスピリチュアルな世界に身をおき心が幽玄の世界にというひと時を持った。特に、入母屋造りの神楽殿における雅楽の音色はすばらしく、身も心も引き締まった。

昔から伊勢音頭でうたわれる「伊勢へ行きたい 伊勢路が見たい せめて一生に一度でも」

しかし、少しばかり残念なこともあった。それは、お伊勢参りに欠かせない味、「赤福餅」が 300 年続く老舗の扉を固く閉じ、参拝者の休憩場所としての受け入れができなかったことである。閉じた赤福餅本店を写真に収める場面は、300 年に一度の巡り合わせ、寂しい現象であった。

わがクラス会の宿泊地は鳥羽市、風光明媚な鳥羽湾に臨む戸田家で海鮮料理に舌鼓をうち仲間と杯を酌み交わせる幸せ、話題は、遠く京都の学生時代や定年後の今の生活などにぎやかなこと、時間がたつのが早かった。このように元気で集える皆回生に、お伊勢さんのご加護がこれからも長く続くように願いつつ、真珠島の散策を持って散会した。

(日野紘孝 記)

## 「38 回生 同窓会報告」

10 月 11 日、38 回生 2007 母校大学昇格記念同窓会を催した。京都駅に集合し貸切バスで、大学に昇格した母校訪問のため一路南丹園部の地へ。校門まで出迎えてくださった山田先生に駆け寄り感謝あいさつ。高橋学長から訪問歓迎のお言葉と学校の現況をお話しいただいた。その後、大学職員の方と学生さんの暖かい雰囲気の中、山田先生が校内を案内していただき、学舎や教育内容の変貌と修学環境のすばらしさに驚嘆と時の流れを感じた。進化を続ける医療科学に思いをはせた母校見学を終了し、母校正面玄関で記念撮影。

バスに山田先生もご同乗いただき、源氏物語宇治十帖や高級茶で知られる京都宇治で、同窓会の宴をもった。参加者は、山田先生はじめ 21 名、同窓生の同伴者 5 名も参加くださった。会場は、宇治川のほとりで、付近は風光明媚で静寂な所。同伴のご婦人方が花をそえ、古今の話題は尽きず時代を右往左往。用意したカラオケを歌う者もなく、山田先生や同窓の友との談笑に夢中で嬉々とした時を過ごした。最後に、山田先生の音頭で、歌詞の「わが母校」を「レ専校」に替え校歌を斉唱、頭の中は青春時代。その後部屋に集まり二次会となり、遅くまで談笑したが、宇治の土地柄が乱れる事もなく雅な集まりであった。

翌 12 日は、散策しながら平等院と宇治茶の茶室対鳳庵へ。平成の大修理を終え 10 月 1 日より拝観可能になった鳳凰堂の内陣を拝し、茶席では煎茶道二条流のお手前を受け、煎茶で口の中にさわやかな甘味が広がった。なごりは尽きないが、次回富山での再会を約して散会とした。歩けるだけの 2 日目であったが、参加者全員健脚で乗り切った。

(人見 記)

## 「40 回生 同窓会報告」

今年は母校が念願の 4 年制大学に昇格し、40 回生一同喜びにたえません。本当におめでとうございます。大学昇格のために大変ご尽力された山田勝彦先生を始め多くの方々に心よりお礼申し上げます。

我が 40 回生より岡本篤彦君が母校の教授に就任され、なお一層嬉しく誇りに思います。岡本君

には母校発展のために益々のご尽力をお願いいたします。

40 回生の同窓会は前回早田君のお世話で平成 17 年 10 月に長崎の地で開催され、多くの級友が集まり懐かしい思い出に花が咲き一夜を過ごしました。その時、「次回は 2 年後、京都」と決まっていたので、今回の開催となり京都在住の者がお世話することになりました。

同窓会は平成 19 年 10 月 13 日(土)に京都鴨川に面した【くに荘】で開催しました。37 名の級友に案内状を発送しましたところ、北は北海道の後藤田君、南は長崎の早田君そしてクラスの美女 3 名等合計 16 名が参加していただけることになりました。返信はがきには「体調を崩しているので欠席」など年輪を感じさせる文面があり少し寂しくなりました。

当日は、山田勝彦先生のご出席を仰ぎ、井ノ崎君の司会のもとで山田先生の挨拶、岡本君による大学の現況紹介に続き山田先生の乾杯で宴会が始まりました。宴会では一人一人に現況や思い出を話してもらい、その思い出話の最中に脱線して全員参加で懐かしい専校時代の思い出がますます膨らんでいきました。宴会場では時間を忘れて酒を酌み交わしていました。そして、宴会後も別室に集まり思い出に花が咲いていました。

久しぶりの再開にもかかわらず、その空白を感じさせない学生時代に戻れた楽しい一夜になり、深夜遅くまで騒いでいました。

翌日は朝食後、母校を見学に行くものや京都を観光するものなど、それぞれ 2 年後に出雲での再会を約束して散会しました。母校を見学した数名は、亀岡から嵐山までの保津川下りを楽しみ、京都を後にしました。

最後になりましたが、お忙しいなかを我々 40 回生のために御出席いただきました山田先生に心より御礼申し上げます。有難うございました。

文責：服部 昭

## 「第 41 回生 京都に集う」

母校の四年制大学の開学を祝う京都での学友会総会に時を合わせて滋賀県で開催の予定でしたが、幹事さんの諸般の事情により急遽京都で開くことになりました。

東北盛岡市から舘澤氏ご夫婦を迎え、8 名が集いました。

昨年の白浜温泉に比べ若干少なかったが、東本願寺前の老舗旅館に宿を求めアットホームな雰囲気の中に楽しいひと時を過ごしました。

今回も舘澤氏より地元東北の銘酒や三陸地方の珍味の「お摘み」を差し入れていただき、京料理とともに心ゆくまで味わさしていただきました。また紙谷氏からは越前名物の「梅干」を持参していただき、いい塩梅に漬かった梅干を賞味しながら、その製法の秘訣や苦労話を拝聴しました。

いずれの品々も地元風土に根ざし、巧みに磨かれて長い年月にわたり受け継がれてきたものであろう。ありがとうございました。

堪能した食事のあとは、ほろ酔い気分で寄る年波に勝てない身体の事、懐かしい京都での学生時代の事、変化の激しい時世の事、等等の話しに華が咲き床に就いた頃には日付がすでに変わっていました。

ご案内に復信をつけてなかったので同窓の現況は把握出来ていませんが、昨秋発刊された学友会会員名簿に変化がないので皆さんご健在のことと存じます。

次回(滋賀県)での再会を約して筆をおきます。

文責：林  
以上

\* 通巻 186 号 2008 年 1 月 10 日発行(H19-No.4)より